

新千年紀に想う



坂田 祥光*

新千年紀でもあり、また二十世紀最後の年でもあるこの正月は世界各地で盛大な催しが行われた。この歴史的な特異時点ともいえる年に遭遇できたことは自分自身にとって大きな喜びである。

本年は国立大学にとっても特異な年となり、設置以来の大改革の始まった年として後世に記憶されそうである。四月からは大学評価機関が発足することになっており、独立行政法人化の方向性も定まるであろう。このところの大学改革のテンポの速さには目を見はるものがあるが、これはこれまで改革を怠ってきたツケが今になって一気に吹き出してきたといえる。国立大学は国民の税金でまかなわれているのであるから、評価システム等を導入して効率的かつ無駄のない運営を行うのは当然ではある。ただ、これまでわが国では教育・研究に対する評価システムが確立されていないので、評価がどの程度うまく実施されるのか多くの人が不安を抱いているのも事実である。日本人は几帳面なので評価を厳密に行いすぎる危険性はあるだろう。そもそも100%正確な評価などありえないのであり、かなり大雑把な評価で良しとすることが肝要ではなかろうか。また、良く指摘されることであるが、基礎研究に対する評価を具体的にどの様に行うのかに対して危うさを感じる人も多い。5年の中期目標期間では判断できない重

要な基礎研究も多いと思われる。例えば100年前の気象データなど当時はさほど重要だとは認識していなかったであろうが、地球環境が問題になってきた現在では貴重なデータである。また、長期間業績のないまま推移した後、目覚ましい成果を挙げた人もいる。「百里を駆ける名馬は常にはいるが、伯楽(馬の善し悪しを見分ける人)は常にはおらず。」という言葉がある。これまで我が国においては名馬を育てる施策は行われてきたが、伯楽を育てたり、伯楽を大切にすることは行われてきていない。評価がますます重要になってくるにつれて、名伯楽をいかに輩出するかも今後の課題となろう。大学改革に関して結論的にいえば、大学に競争原理を導入するのは好ましいことではあるが、周囲の状況に左右されず基礎的研究を行ってきた国立大学の伝統も大切であり、両者のバランスをいかにうまくとっていくかがポイントではなかろうか。

大学と企業との関係も本年から大きく変わりそうである。種々の規制緩和や技術移転機構(TLO)の新設などによって産業界との関係強化のシステムが整いつつある。また、独立行政法人化されれば運営交付金だけに頼らずに外部資金の導入も必要であることから、これを先取りした形で多くの大学が一斉に企業の方に顔を向けはじめた。従来 of 産学 の関係を見直し、大学で得た成果の企業化を目指すという点では評価できる。ただ、産業界との関係を癒着を起さずに適切な位置に保つためには、より高い節度ある倫理感が大学側に要求されよう。また、企業との関係の深い研究が良い研究であるなどの行きすぎのないよう望みたいものである。

以上、新千年紀の年頭に当たって、私の個人的な感想を述べさせていただいた。



* Yoshiteru SAKATA
1938年5月14日生
昭和37年大阪大学・理学部・化学科
卒業
現在、大阪大学産業科学研究所、
所長、教授、理学博士、有機化学
TEL 06-6879-8508
06-6879-8475
FAX 06-6879-8479
E-Mail sakata@sanken.osaka-u.
ac.jp